俺に言いたい事がたくさんあるんだろう。
「戻ろうか」
　手を差しのべたら彼は何も言わずに握り返してくれた。二人で歩いてジプスへ戻り、そのままヤマトの使っている部屋へ向かう。昨夜と同じようにベッドに座った。
「何を笑っている？」
「結局ヤマトといるなあって。きっと怒ってると思ったから、声かけられなかったのに」
「私が何を怒ると？」
「何をって……だって、俺は、きみの提案を蹴ったわけだし」
　今だってヤマトの声は不機嫌を隠しきれていない。心は決まっていてもヤマトの目を見ると気が咎めた。なぜなら俺は、きみから逃げようとしているのだから。
「お前の選択なら受けいれると言っただろう。完全に納得するのは難しいがな」
　震えそうになる手に手を重ねられ、もう片方の手に顎を捉えられた。間近でまっすぐ見つめられればもう視線を外せない。
「ヤマトは本当に変わった。前のヤマトだったらさ、そんな選択は許さないって襲いかかってきそうなものなのに」
「それは以前の世界で既にやった。そして私は負けたのだからな。同じ轍を踏む気はない」
「そういえば、そうだったね」
　互いの選択を許せなかった者同士戦い、和解して俺達はここにいる。体感ではあれから一週間経っていないはずなのに、ポラリスと戦った日々はとても遠い気がした。
「私はお前を許すつもりはない」
　言って彼は俺の肩を押してベッドへ倒した。すぐに重ねられた唇は言葉とは裏腹に丁寧で優しい。昨夜を思いだして目を閉じる。差しだした舌を受けいれるヤマトの唇は温かく、決めたはずの気持ちを迷わせる。部屋の外の全てを忘れてずっとこうしていたいなんて、叶うはずないのに。
「このままこうしておければいいのにな」
　顔を上げたヤマトがそう言うと同時に頭上でガシャリ、と金属音がした。頭上に回されていた手を動かすとガチャガチャ鳴る。覚えのあるこの音は。
「手錠なんてどこで手に入れたんだよ」
「ミヤコがお前達を拘束した時の物を拝借した」
　油断した。ヤマトもすっかりキスに没頭していたと思っていたのに。
　身動きできない頬や首筋を撫でられ、蹴れないように身体を足で押さえこまれた。
「世界が終わるまでこの部屋に繋いでおいてやりたい」
　ぞっとする程甘い本気の声で囁かれる。
　ヤマトが本当にそうするつもりならこれはかなり危ない